



赤十字ありがとう通信 NO.4

広島のみなさまのおかげで、私たちの活動が成り立っています。
赤十字の様々な取組みや提供できる情報を紹介します。

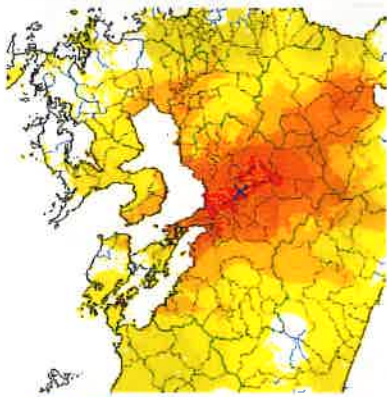
+ 日本赤十字社 広島県支部
Japanese Red Cross Society

発行日/平成28年9月1日 発行/日本赤十字社 広島県支部 〒730-0052 広島県広島市中区千田町2丁目5-64

日本赤十字社 広島県支部活動報告

「熊本地震」の救護活動に当たりました。

平成28年4月14日以降、熊本地方を震源とするマグニチュード7.3、最大震度7の地震は、熊本県を中心として大きな被害をもたらしました。



震度 4 5弱 5強 6弱 6強 7

熊本地方M7.1 【震源要素】平成28年4月16日1時25分
【情報時刻】平成28年4月16日1時40分



地震により倒壊した益城町(熊本県上益城郡益城町)

平成28年4月16日午前1時25分の本震発生後、日本赤十字社広島県支部は、被災地の要請を受け、同日午前5時50分に救護班第1班を派遣。以降、5月12日まで継続的に7班(延べ67名)を派遣し、被災地の救護活動に当たりました。また、4月16日、17日には熊本県及び大分県に、災害救援物資の毛布4,500枚、安眠セット629個を届けております。救護活動以降は、長らく避難所生活を送っている被災者に対して、こころのケア活動に当たりました。



災害対策本部ミーティング(4/17 3:50)



益城町避難所での救護活動(4/17 6:45)



救護班第1班出発式(4/16 5:50)



益城町避難所での救護活動(4/17 13:30)



赤十字飛行隊による物資の輸送(4/17)

みなさまからいただいた活動資金のおかげで救護活動を行い、毛布や安眠セットを配布することができました。ありがとうございました。

まだまだみなさまの助けが必要です

活動資金のお問い合わせは [日本赤十字社 広島県支部]

TEL 082-545-5011

赤十字の減災 ①

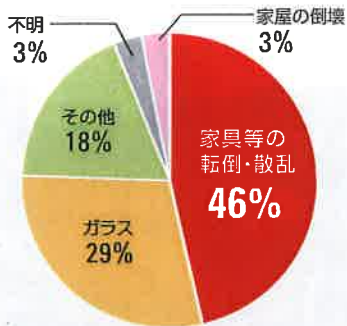
地震災害に備えるために

家具等の転倒を防止しましょう

地震での負傷は 約50%の人が 家具の転倒、散乱でした

今回の熊本地震においても同様ですが、地震は突然発生します。近年は、地震への備えとして耐震化対策等が進み、建物自体が倒壊してしまうことは少なくなってきました。しかしながら、地震が起きると、毎回同じ原因で多くの負傷者が出ています。

内部被害による怪我の原因



これまで、避難訓練等の災害発生後に備える訓練は多く実施されてきましたが、その殆どにおける前提は、「災害が起きても負傷せず、普段どおりに動ける」ことでした。結果として、地震が起こり負傷してしまったため、その訓練を活かせなかったケースは多くあります。地震が起きたときに、まず自分が、身の周りの人がケガをしないように備えておくことはとても大切です。

地震により転倒・落下した家具類

●家具の転倒



L字型金具で
転倒防止



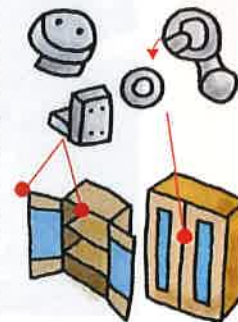
落下防止バー

●本棚等の収容物落下防止

●扉開放による散乱



感振ラッチ 扉開放防止器具

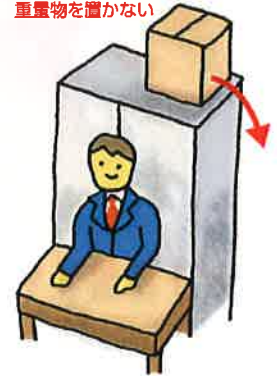


●扉開放防止器具の取り付け

●重量物の落下



●家具の上に
重量物を置かない



オフィス家具等の転倒防止対策の例

赤十字の減災 ②

災害時のみならず

広島に住む人・来る人に「安全で安心な広島」を提供するために

赤十字講習を活用してください

AEDを設置している

「心肺蘇生・AEDを知る」
コース(受講証交付)

AEDを設置している企業・団体様にお勧めです。



高齢の方に接する企業

「高齢者を知る」コース
(受講証交付)

ホテルや劇場、博物館などの企業・
団体様にお勧めです。



子どもが集まる企業

「こどものけがと急病を知る」
コース(受講証交付)

遊園地や商業施設などの企業・
団体様にお勧めです。



●講習を開催したい場合はまずはお電話でお問い合わせください

お問
い合
わせ

日本赤十字社 広島県支部
Japanese Red Cross Society

〒730-0052 広島県広島市中区千田町2丁目5-64

TEL 082-545-5111

FAX 082-240-2741

赤十字の誕生



ソルフェリーノにおけるデュナンの救護

赤十字の父とよばれるアンリー・デュナンは、1859年、イタリア統一戦争の激戦地ソルフェリーノを通りかかり、たくさんの傷ついた兵士が放置されたまま苦しんでいるのを見ました。「傷ついた者に、敵も味方もない。人間は、みな兄弟です。」というデュナンの呼びかけに、町の人々は協力して傷ついた兵士の救護活動を始めました。

デュナンは、この体験を「ソルフェリーノの思い出」という本にまとめ、平和なときから、たとえ戦争がおこっても敵味方の区別なく傷ついた人々を救護する団体をつくっておくこと、また、その団体が安全に活動できるよう、国々が約束しておくことの必要性をうたえました。この本は、世界の人々の心を動かし、1864年に赤十字条約が結ばれ、国際的な赤十字が誕生しました。

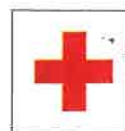


アンリー・デュナン

赤十字の標章

赤十字の標章（マーク）は、1863年の国際会議において、赤十字の創始者デュナンの祖国スイスに敬意を表し、スイス国旗の配色を反転させ、「白地に赤十字」と決められています。この標章は、保護の標章として戦時において、軍の衛生部隊や赤十字の救護員に属する人、建築物、施設、車両及び資材等に付し、これらを攻撃の対象としてはならないと決められています。

また、平時には表示の標章として、赤十字社に關係する人や建築物、車両、出版物等に付し、赤十字の目的を達成するために使用されています。これらの標章の使用は、国際法「ジュネーブ条約」さらに国内法（日本の場合は「赤十字の標章及び名称等の使用の制限に関する法律」）で厳しく制限されています。また、現在イスラム教国の多くが使用している「白地に赤い三日月（赤新月）」のマークと2005年12月に新たな標章として認められた「白地に赤い菱形（レッドクリスタル）」も赤十字と同じ意味・効力を持っています。



赤十字



赤新月



レッドクリスタル

日本赤十字社の誕生

明治10年(1877年)2月に起こった西南戦争では、政府軍と西郷隆盛率いる反政府軍との間で激しい戦闘が繰り返され、両軍に多数の死傷者が出ました。この時、この悲惨な状況に対して、佐野常民(さのつねたみ)は、元老院技官時代の友人である大給恒(おぎょうゆずる)とともに、救護団体による戦争時の傷病者救護の必要性を痛感し、ヨーロッパで行われている赤十字と同様の救護団体を創ろうと思い立ちました。

そして、明治10年(1877年)3月、佐野、大給二人の趣旨に賛同した発起人によって博愛社規則を定め、政府に対し救護団体「博愛社」の設立を願い出しましたが、当時は「敵味方の区別なく救護する」という考え方は理解されず、この願いは認められませんでした。

このため博愛社の設立を急いだ佐野は、征討総督である有栖川宮熾仁(ありすがわのみやたるひと)親王に、直接、博愛社設立の請願書を提出、明治10年(1877年)5月1日、有栖川宮熾仁親王は英断をもってこの博愛社の設立を許可されました。

救護活動の許可を得た博愛社の救護員は、直ちに現場に向いて、両軍の傷病者の救護にあたりました。

このような西南戦争での博愛社の活動は、敵の負傷者まで助けるという考えが理解できなかった当時の人々を驚かせ、人道という精神文化の基礎を植え付けました。

明治19年(1886年)佐野常民らの努力が実って、日本政府のジュネーブ条約加盟が実現し、明治20年(1887年)5月に博愛社は「日本赤十字社」と改称し、赤十字国際委員会の承認を経て、国際赤十字の一員になりました。



佐野 常民



有栖川宮熾仁親王から博愛社設立の許可を受ける佐野常民

広島支部の誕生

かつて広島は全国でも重要な軍都の1つでした。明治初期から中四国を管轄する広島鎮台が置かれ、その後はこれに代わる第五師団の本拠地となり、陸軍の海外出兵はすべて宇品港から出発していました。

こうした関係から、宇品港を開いた千田貞暁県知事の尽力もあって、明治19年(1886年)11月に現在の支部の前身である広島博愛社(社長・千田貞暁知事)が広島市下中町の広島博愛病院内に、全国に先駆けて創設されました。

明治20年(1887年)に博愛社から改称した日本赤十字社は、赤十字精神の普及と事業の推進を図るため、全国要要の地に支部を、各府県には地方委員部を設置することを決定しました。

これを受けて、広島博愛社は明治21年(1888年)1月に社員総会を開き、日本赤十字社の支部に改組することを決議しましたが、本社の地方支部内則に照らしてみると、広島博愛社は社員の年拠出金が内則に定めた額に達していないため、支部として資格がないことが判明したのです。

けれども、同社は、明治19年(1886年)の創立以来、有志者の勧誘に努め、社員加入者が増加しつつあること、さらには、広島が第五師団司令部の本拠地であり、支部設置の必要性が高いことなどから、社長の千田貞暁は、日本赤十字社社長の佐野常民に「広島博愛社を日本赤十字社広島支部と改称する願い書」を提出し、野津道貫(のづ みちつら)第五師団長の協力を得てようやく承認を得ることができました。

これにより、明治21年(1888年)7月10日、広島市水主町の興産議會本部内に全国で初めての支部が広島に誕生しました。

戦時の救護活動

日清戦争と救護

明治27年(1894年)8月、日清戦争が始まり、海軍兵站兼碇泊司令部が宇品に置かれ、戦地から輸送される傷病者の看護のため、専門的な知識・技能を身につけた赤十字看護婦(20人)を含む赤十字救護班が本社において組織され、広島陸軍予備病院に配属されました。その後も広島支部を含めた多くの支部から、看護婦が傷病兵の看護のため派遣されました。明治28年(1895年)7月まで215人の看護婦が5,088人も患者を救護しました。また、有栖川宮熾仁親王、外務大臣陸奥宗光、清国全権大使李鴻章などの要人の看護も行いました。

日露戦争と救護

明治37年(1904年)2月、日露戦争が始まり、広島には、宇品碇泊場司令部、広島陸軍予備病院、呉海軍病院などが存在していたため、救護においても広島がその中心となり、全国から15個班(広島支部編成の1班を含む)の救護班が広島陸軍予備病院に派遣されました。また内地での勤務のほか、看護人(男性)を主体に組織された第112救護班が広島支部から戦地に派遣され、明治37年(1904年)7月から38年(1905年)11月までの間、中国の大孤山、遼陽などの戦場で救護にあたりました。



広島陸軍予備病院における赤十字看護婦の救護活動

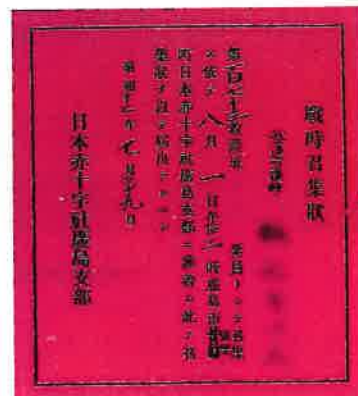
日中戦争・太平洋戦争と救護

昭和前期は戦乱に明け暮れた時代でした。昭和6年(1931年)の満州事変勃発から、昭和20年(1945年)の第二次世界大戦の終結までの十有余年続いた戦争は、人々の生活を破壊し、数百万人もの尊い人命を奪いました。日本赤十字社では、終戦までの期間、960の救護班を編成し、北は旧満州から南は太平洋の諸島にまで及び広い地域で、軍の医療班とともに、約33,000人が救護活動にあたりました。

広島支部も16個班を編成。国内では広島や福山の陸軍病院、呉や佐世保の海軍病院、国外では北京や漢口(中国)の陸軍病院、マニラの海軍病院やビルマ方面の軍兵站病院、病院船などで679人が救護活動にあたりました。この間、全国で663人の赤十字救護員が死亡し、広島支部でも48人が殉職しました。



救護班編成式(支部講堂にて)



戦時召集状



広島赤十字・原爆病院



庄原赤十字病院



三原赤十字病院



日本赤十字社中四国ブロック
血液センター・広島県赤十字
血液センター合同社屋



日本赤十字広島看護大学



広島県支部社屋